ベトナムと藤本文朗先生

黒田　学

藤本文朗先生の研究には、ベトナムのイメージが強く結びつきます。藤本先生がベトナムとベトナムの障害児者に抱く強い思いに、誰もが惹かれ、その魅力に引き込まれてきたことでしょう。藤本先生のベトナムでのご活躍について、またベトナムの人びとや私たちに与えてくださった影響力について、若輩者の私が述べさせて頂くのは大役であり、力不足を感じています。しかしながら、光栄にも、藤本先生から執筆のご指名を賜りましたので、以下述べさせて頂きます。

1. 藤本先生のベトナムでの足跡

藤本先生が初めてベトナムを訪れたのは1980年12月です。藤本先生の報告[1]によれば、ベトナム訪問は、その年、京都での全障研（全国障害者問題研究会）第13回大会で、100年先の障害者問題を考えようという集いが催されたことがきっかけです。そこでは、「戦争」「アジアの発展途上国」「社会主義をめざす国」の3つをキーワードに考えるべきということで、ベトナム訪問（京都ベトナム障害児教育調査団）が決まりました。ベトナム戦争終結（1975年）からまもない時期に加え、ベトナム反戦運動を通じての、ベトナム民族の力と心をよく知りたいという思いもあったようです。また、この1980年というのは、前年の1979年に養護学校教育義務制が実施され、翌1981年の国連・国際障害者年を控えていたこともあって、全人類的レベル、発展途上国を含めた世界的レベルで障害者問題に関心を持つことを背景にしていたようです。

この1週間のベトナム訪問については、『障害者教育科学』（第2号、1981年）[2]に報告されています。その他には、『障害者と戦争―ベトナムからの証言』（青木書店、1982年）にまとめられています。ベトナム初訪問では、①戦争が多数の障害者を生み出すこと、特に枯葉剤被害による障害は次の世代にも影響を及ぼすこと、②戦費は障害者のための医療・福祉・教育の費用を圧迫すること、③戦争という力による支配は障害者などの社会的弱者を住みにくくさせるということ、を明らかにされました。

藤本先生が本格的にベトナムに関わるようになるのは、1985年、文部省（当時）の短期在外研究員としてのハノイとホーチミン市での留学です。そこでは、ベトナムの障害児教育の歴史を踏まえ、南北ベトナムの障害者（精神障害者）に対する対応の違い、知的障害児教育は「夜明け前」の状態であることをつぶさに感じておられます。とりわけ、ホーチミン市のツーズー病院では、院長のフォン博士から結合双生児であるベトとドクの特製車いすの作成を依頼され、それがきっかけで「ベトちゃんドクちゃんの発達を願う会」（以下、ベト・ドクの会）を結成し、1985年からベト・ドク支援のために何度も訪問するようになります。ベト・ドクの会の取り組みは、支援の大きな輪をつくることとなりました。枯葉剤に含まれたダイオキシンと人権、平和問題という基本問題に迫った取り組みとなりました。しかし他方で、ベトちゃんやドクちゃんだけでなく、ベトナムにいる多くの障害児への支援をどうして行わないのかという新聞投書をきっかけに、幅広い支援を考えるようになります。

それが1992年から現在まで継続されている、日本ベトナム友好障害児教育セミナー（後に、名称に「福祉」が加わる。以下、セミナー）の開催に繋がります。お金だけの支援ではなく、「知と愛と互いに学び合う交流を」をテーマに、ホーチミン市国家大学を会場に、日本とベトナムの障害児教育に関するレポートを、対等平等に報告し合う形態が取られました。

1994年の第3回セミナーから1996年第5回セミナーにかけて、ホーチミン市および郊外（ニャーベー県）の在宅不就学障害児の実態調査が行われました。単なる交流ではなく共同研究として、不就学児の生活実態を把握し、問題意識を共有することで、就学に向けた課題を明らかにしようというものでした。この調査は、藤本先生が福井大学時代に行った、鯖江市の在宅不就学障害児の訪問調査が基礎になっており、在宅障害児の自宅を一軒一軒訪ね歩き、障害児の実態を知り、問

題の本質を把握する手法をベトナムの地で再現したものでした。藤本先生は、この調査を通じて教育臨床、障害児臨床の研究方法を身につけることができたこと、そして「すべての障害児は人間として発達するために教育を受ける権利があることをベトナムの人々、日本の人々にも理解して欲しかった」と述べています[3)]。

また、この時期から枯れ葉剤被害障害児調査に取り組まれています[4)]。第1回（1995年）ハノイ市近郊ナムディン省ほか、第2回（1996年）クアンチ省、第3回（1999年）ハイフォン、第4回（2001年）ビンフォク・タイニンで取り組まれました。米軍が、30～40年前にベトナムの地で散布した枯れ葉剤と障害児出生の因果関係を疫学調査によって明らかにするために、日本、ベトナム、韓国の医療関係者とともに取り組まれたのでした。なお、この調査の様子は、テレビ朝日「サンデープロジェクト」（1996年2月11日）で放映され大きな反響を呼びました。

さらに、1997年には全障研創立30周年記念事業として、第6回セミナーが開催され、日本全国から75名の参加がありました。参加規模の拡大と訪問先の中部フエ市との関係も築かれました。1998年～2000年にかけて、セミナー（第7回～第9回）の開催とあわせて「学校卒業後の進路と生活実態に関する調査」が取り組まれ、その中で障害者の就労問題の厳しさ、課程制教育制度による「卒業」そのものの難しさが浮き彫りになりました。その中で、藤本先生は、「日本では知的障害児の場合、5,000カ所の共同作業所に勤めている。この人々の仲間にあった仕事の場をベトナムでも求められる」[5)]と就労と社会参加の課題を提起されています。

この時期の藤本先生の画期的な活動は、1999年10月ホーチミン市幼児師範学校にベトナムで初めての障害児師範学校（ハノイ師範大学の分校という形式）を、ベト・ドクの会の支援（旧郵政省ボランティア貯金による助成含め）として実現されたことです[6)]。この学校は、セミナーを土台にして、障害児教育を恒常的に学べる場をつくって欲しいというベトナム側の要望にこたえて設置されたもので、約30名の現職教師が２年間学ぶという特別コースという形態でした。この現職教員養成の取り組みは、その後、立命館大学を窓口にして、2003年～2005年にJICA（国際協力機構）の支援を受けて引き継がれ、さらに2008年9月からは、第3期ともいうべき事業（ハノイ師範大学にて）が開始されています。藤本先生の功績が大きく実り、引き継がれています。

2. 藤本先生から受け継ぐ志（こころざし）

藤本先生の研究スタイルは、ベトナムにおける研究に限らず、事実を徹底的に把握することから始まります。眼前の事実にとどまらず、潜在的な問題、問題状況を把握し、分析・考察を加え理論化することに真摯に取り組まれてきました。

さらに、科学者として、事実を把握し考察するだけではなく、事実の背後にある問題状況解決への道程を指し示し、解決に向けての運動を組織されてきました。それはまさに科学的、実証的な研究スタイルであり、藤本先生によれば教育臨床的研究法[7)]と位置づくものです。研究者として机上の学問に安住するのでなく、すべての子どもたちや人びとの教育を受ける権利、人間らしい生活の保障を実現するために、常に運動の先頭に立ち、リードされてきました。

また、科学的な研究というと、やや無味乾燥な研究のように捉えられる方もいるかもしれませんが、藤本先生は冷静な頭脳と同時に暖かなハートを持って、事実に向き合うだけでなく、子どもたちやその保護者、地域の人びと、教師などの専門家にしっかりと耳を傾け、現実の矛盾やその悩みを共感的に理解することに努めてこられました。そして、藤本先生は日本だけでなく、ことばも文化も異なるベトナムにおいて、日本と同じように、教育臨床的研究法を貫かれてきました。

筆者にとっては、まだ博士課程に在学していた頃、1994年から1996年のホーチミン市およびその郊外を対象に行った在宅不就学障害児の生活実態調査に同行させてもらいました。他大学の院生で研究分野も異なる筆者は、藤本先生から多くを学ばせて頂き、その後の研究者として進むべき道を示唆して頂いたと思っています。

（くろだ　まなぶ　滋賀大学教育学部准教授）

【注】

1) 藤本文朗「ベトちゃんドクちゃんだけでなく—ホーチミン市でのセミナー10年の総括」藤本文朗・藤井克美・黒田学・向井啓二編著　2008年『手づくりの国際理解教育』文理閣、48～64ページ、所収。

2)「京都ベトナム障害児教育調査報告特集」と題され、全ページがベトナム調査報告となっています。京都を中心にした現場教師8名と大学研究者9名の計17名が訪問団に参加し、首都ハノイとホーチミン市を9日間訪問しています。教育省、医療省、病院（附設の就学前聴覚障害児の研究所）、母子保健センター、聾学校、障害児学校、青年学校、盲人協会など、短期間に精力的に訪問していることが詳細に記されています（『障害者教育科学』第2号、1981年）。

3) 前掲書1)、55ページ。

4) 前掲書1)、57ページ。藤本文朗「床に臨んで教育を考えるとは」藤本文朗退官記念論集編集委員会編　2000年『座して障害者と語る』文理閣、13ページ。

5) 前掲書1)、56ページ。

6) 前掲書1)、56～57ページ。

7) 藤本文朗「床に臨んで教育を考えるとは」藤本文朗退官記念論集編集委員会編　2000年『座して障害者と語る』文理閣、14～20ページ。